

新中国での原始社会の究明

—仰韶文化をめぐるいくつかの問題—

秋 山 進 午

【要約】 中国文明の流れのうちで、仰韶文化はその最も源流にあたる重要な流れである。解放後の考古学的調査の急進展に伴ない、その遺址もおびただしい数が発見されたが、それとともに、中原の仰韶文化の中に廟底溝型式と半坡型式の二つの文化形態が存在することが明らかとなり、その後関係や、そこに示される文化性質が徐々に論じられてきた。そうはいえ、廟底溝と半坡の二大遺址しか正式報告書が出版されていない現状では、我々はそうした議論に加わるすべを持っていない。最近発表された蘇秉琦氏の論文も資料的に検討する材料を持たない点では同様であるが、そこに示された編年や社会性質解明への方法論は科学的な内容を持っており、傾聴に値いするものがある。この「蘇論文」を中心に、最近発表された主要な論考をまじえて、仰韶文化をめぐるいくつかの問題点を検討し、その解明への努力の中にみられる中国先史考古学者達の「原始社会の究明」への情熱に触れてみたい。

史林 五〇巻一号 一九六七年一月

はじめに

新中国を訪れる人々のうち、およそ歴史に興味をもつほどの人で、西安半坡博物館を訪ねない人はないであろう。一九五八年に開館したこの博物館の中心は、二、三〇〇平方米に達する発掘されたままの仰韶時代村落遺址にそのまま屋根をかけたものである。それは単に大規模な遺址博物館であるだけでなく、新中国の文化財保護政策の好例として、また科学の成果を人民大衆に結びつけ

る社会教育の場として、訪れる人々に原始社会の様相を実物をもって解明する原始社会遺址の専門博物館なのである。この遺址の調査で得られた学術上の知見は「西安半坡」^①の報告書として公開され、精密な学術内容に加えるに独特の方法論を駆使して仰韶文化時期の原始社会究明にいどんだ野心的な内容を持っている。

この報告書を僅か四年前に公刊された「廟底溝と三里橋」^②の報告書と比べてみたとき、その短かい間に見られる中国先史考古学界の学問上の進歩と強烈な問題意識に驚かざるをえない。

『廟底溝と三里橋』が出版された段階における中国先史考古学の
の大意は水野清一博士によって早く紹介され、概説書としては一
九六〇年発行の『世界考古学大系』第五卷（東アジア）に述べ
られ、同じ頃に発行された松崎寿和氏の『新黄土地帯』の好著も
ある。

当の新中国においては新中国成立十周年を記念して編纂された
『新中国的考古收穫』が解放後の考古学上の新知見の集大成で、
先史時代はそのうち原始社会として収録されており、その日本語
訳も杉村勇造氏によっていち早く出版されている。この書物は一
九六一年頃までの知見を網羅して以後の研究の出発点であろ
う。

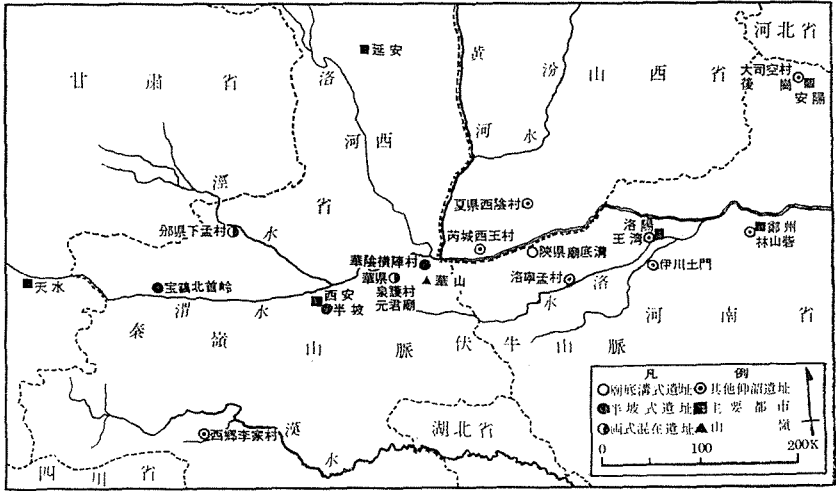
一九六三年一月二日に京都を訪れた中国学術代表団の一行に中国
科学院考古研究所の夏鼐所長が加わっておられ、歓迎の京都集会
の席上で、博士は「近三年来の考古收穫」と題して最新ニュース
を伝えて下さったが、それに更に新しい知識を盛った「我国にお
ける近五年来の考古收穫」が『考古』誌上に発表され、近藤義郎
氏による訳文がある。

そうした考古学上の進歩はもとよりであるが、新中国の先史考
古学者達が原始社会の究明へかける意気込みも素晴らしい。先の夏
鼐博士を囲む京都集会において博士は先史時代研究の主要目的の

一つを、「歴史発展段階上の原始社会を明らかにすること」と断
言されている。考えてみれば至極当然のことながら、しかも考古
学にとってはなかなか至難な目標にズバリと切込む意気込みに、
今更ながら考古学研究にたずさわるうえで自からの態度に反省
を呼びさまされたことであつた。こうした方向は『新中国の考古
收穫』においても明確に打ち出され、先の『西安半坡』発掘報告
においても鋭い突込みをみせている。

加えるに、最近鬪鶏台発掘報告で有名な蘇秉琦氏が「仰韶文化
のいくつかの問題について」（『考古学報』一九六五年第一期——
以下「蘇論文」と略称——）と題する長文の研究をのせ、これま
で様々に議論のあつた仰韶文化の編年や時代性質について一つの
断案を下している。

『世界考古学大系』刊行以後わずか六年にしかならないが、そ
の間の中国先史考古学の発展は、それ以前と同じく実に目覚ましい
ものがある。それらの研究の動向を紹介しながら、その目的とす
る「原始社会の究明」の状況を紹介することは、中国先史時代の
研究上だけでなく、日本やそれ以外の地域の先史時代を研究する
人達にも多少の参考になると信じる。何らかの意味で中国の経歴
の紹介が役に立てば、紹介者としてこれに勝る喜びはないであろ
う。



第1図 仰韶文化遗址地図（本籍関係のもののみ）

仰韶文化の編年について

仰韶文化のうちに廟底溝型式と半坡型式とのあることが明らかとなつてからは、両者の編年が仰韶文化研究上の大きな争点となつてきた。編年が仰韶文化を論じる際の基礎作業であるのはいうまでもないことだからである。

この問題をめぐる数多くの論考は、すでに一応の整理が行なわれているので細目はそれにゆずり、必要の都度引用するにとどめて、ここでは最近発表された前記「蘇論文」を中心に詳説したい。

「蘇論文」はまず、半坡型式、廟底溝型式を、それぞれ単にその名のもととなった遺址からの出土品としてでなく、仰韶文化全体中の一つの段階として位置づけることからはじまっている。したがって半坡遺址の最上層出土のものは、廟底溝第Ⅱ期文化、泉護村第Ⅱ期文化と近似し、むしろ客省庄第Ⅱ期文化（陝西竜山文化）を代表とする別種の文化の最初の段階としてとらえ、年代的に廟底溝第Ⅱ期文化、泉護村第Ⅱ期文化と平行として半坡型式から外している。次に洛陽王湾ほかの洛陽地区と、山西芮城西王村・夏县西陰村ほかの晋南（山西省南部）地区、さらに大司空村・后崗等の河南省北部と河北省西部地区、の三地区にそれぞれ地域的特性を認めて廟底溝・半坡両型式から区別している。このよう

に、まず廟底溝型式と半坡型式とを仰韶文化のうちに時間的・地域的に位置づけることを行なっている(第1図遺址地図参照)。

仰韶文化を半坡型式と廟底溝型式以外に細分化する試みは、先に楊建芳氏によって四地区・五類型に細分化する説がある。¹²⁾ 豫西

(河南省西部) Ⅰ 晋南(山西省南部)、鄭州西部 Ⅱ 澠池東部、豫北(河南省北部) Ⅲ 冀南(河北省南部)、陝西関中(所謂中原、の四

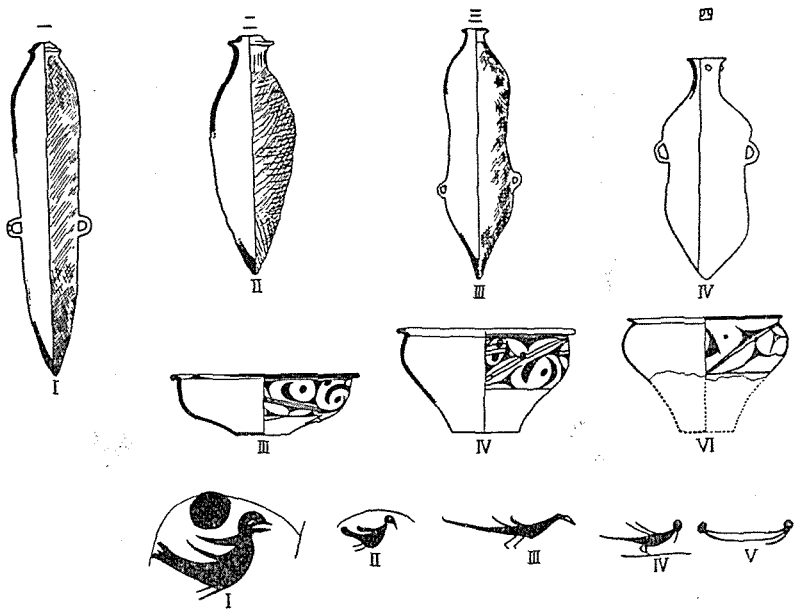
地区に分ける楊氏のこの区分は表現こそ進え「蘇論文」の地域区分と同様であるが、各地域ごとに独自の発展を考える「蘇論文」

に対して、楊氏は土器を五型式に分けて各地区共通の型式変遷を考えようとした所に違いがあり、この点に方殷氏の批判をうけた。

「蘇論文」のうち最も精彩のあるのは廟底溝・半坡両型式の土器形態による編年であらう。

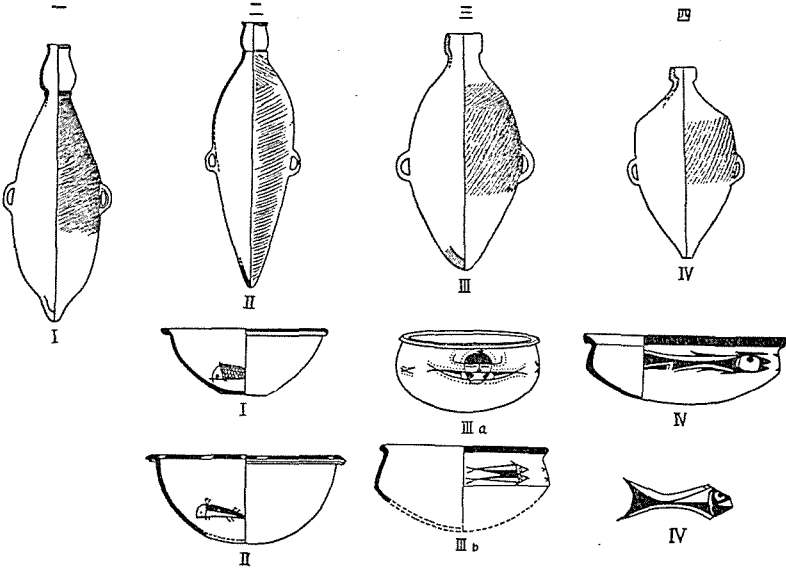
〔廟底溝型式〕廟底溝型式土器の編年には、廟底溝遺址と陝西省華県泉護村遺址出土品のうちで、最も典型的な双唇小口尖底瓶と彩陶盆をえらんで第2図の編年を行なっている。小口瓶はⅣ形式に、彩陶盆のうち植物紋はⅣ形式に、鳥紋はⅤ形式に分け、段々に丈高くなる盆の器形変化とともに、植物紋を、簡単に素朴なもの↓繁雑なもの↓のくり返し↓簡単化しばらばらとなる、と配列し、鳥紋は写実的なもの↓写意あるもの↓象徴的なものへ、と並べる。小口瓶は特に口縁部の形式変化から、口縁上に上口を加え

組合 双唇口尖底瓶 植物圖案彩陶盆 鳥紋



第2図 廟底溝型式土器編年図表(「蘇論文」による)

組合
瓢形口尖底瓶



魚紋彩陶盆

第3図 半坡型式土器編年図表（「蘇論文」による）

		廟底溝型式		半坡型式	
		双唇小口瓶	鳥紋盆	瓢形口瓶	魚紋盆
四	一				
三	二				
二	三				
一	四				
		IV	III	I	
		IV	III	II	
		V			
			IV	I	
			V	II	
				III	
				IV	
					I
					II
					III
					IV

る↓上口が下口をおおう↓上口が子口になる↓上口は遺制となる、との変化を器体部の変化とあわせ、これらを組合わせて編年を行なっている。

このように、土器形式、ことに口縁部の形式変化から編年を行なう試みは、さきに華泉護村南台地区の発掘略報告において、仰韶灰坑の層位関係より、この地区の仰韶文化を早中晩の三期に分ち、それぞれの層位に伴なう小口尖底瓶の口縁の形式変化を图示している。

概報なので精しいことは分らないが、その挿図と「蘇論文」の第2図とを比較してみると、華泉護村の早期は「蘇論文」の廟底溝型式第二式にあたり、中・晩期はともに廟底溝型式第三式に相当し、両者は補ないあうものといえよう。この華泉護村の正式報告は近く出版されるようで、詳細はいずれ明らかにならう。

〔半坡型式の編年〕半坡遺址と並んで半坡型式の遺址として陝西省の華泉元君廟・華陰横陣村・宝鶏北首岭の諸遺址があり、そ

れらに共通の、半坡型式として特徴的な土器である瓢形口尖底瓶と魚紋彩陶盆とを編年の資料としてとりあげる。

尖底瓶・魚紋彩陶盆ともにⅣ型式に分けられ、第3図のごとく尖底瓶は口縁部の変化から、Ⅰ式は壺形口、Ⅱ式は罐形口、Ⅲ式は杯形口、Ⅳ式は碗形口へと推移している。

魚紋盆の器形変化は、Ⅰ・Ⅱ式の円い器腹からⅢ式の折目のある腹部へ、更にⅣ式の折目ある腹部で浅い盆へと変り、それに対応する魚紋は、写実的なものから簡単化し、さらに図案化へと変化し、以上の組合わせが編年の基準となっている。

〔半坡型式と廟底溝型式との関係〕前項で半坡型式と廟底溝型式のそれぞれの編年を紹介したが、残念ながら資料とされた遺址の発掘報告がすくなく、「蘇論文」の編年を検証することが困難である。とはいえ、とりあげられた土器は、それぞれの遺址の代表的な土器であり、彩陶文様も同様であって、その点、先の編年を一応の基準とすることが出来る。

ところで、この半坡型式と廟底溝型式の両者の先後関係については次の三説が出されており、『考古收獲』でも結論を保留している。

- 一、廟底溝↓半坡^②
- 二、半坡↓廟底溝^①

三、両者並行^①

おのおのの意見の内容は、これも先の李衍垣氏の綜括に精しいのでそれにゆずる。

「蘇論文」はさきの廟底溝型式、半坡型式の編年を根拠として、三の廟底溝、半坡両型式並行の立場に立つ。

第一に両型式遺址中の主要な特徴を持つ器形の変化の順序が相似していること。器形では第2、第3図のごとく、各々が一定の変化発展を示しており、彩陶文様も半坡型式での魚紋、廟底溝型式での植物紋・鳥紋とそれぞれに写実的なものから形式化し、さらに図案化するという並行発展関係にあつて、両者は独自の発展過程を示し、どちらかが先になる後になるというものではない。

第二に廟底溝・半坡両型式の平底瓢形瓶の口縁の変化過程が小口尖底瓶の変化と相似すること。

第三に廟底溝型式の特徴器物の一つの双唇口瓶が半坡型式の特徴器物の瓢形口瓶と共存している（横陣村、北首岭の例）。

第四にその逆に、半坡型式に特有の瓢形口瓶が廟底溝型式の双唇口瓶と共存している（廟底溝、泉護村の例）。

第五に陝西省邠県下孟村の発掘で半坡型式の中期と廟底溝型式の後期とが層位的に出てきた。

以上の五点をあげている。さらに「蘇論文」では経済生活上に

も考察をめぐらし、農業收穫工具のうえで差はないが、半坡型式遺址では石斧、石鏟等の石製伐木具が多く、また漁叉、釣針、矛頭、漁錘、鏃などの漁具があり、農業のほか漁撈伐木に従事したのに対し、廟底溝型式遺址では農業を主体とし、漁撈伐木等はあまり盛んでなかったことを示すと考えている。

以上を総合して、廟底溝型式と半坡型式の両者は、仰韶文化の発展過程中の二種の重要な形態であって、発展の先後関係ではなく、その両者の分布範囲は河南省陝東から陝西省西安までの關中東半部（廟底溝型式）、関中西半部一帯（半坡型式）、の限られた範囲で、他の地域には、それぞれの地域性をもった仰韶文化が見られ、仰韶文化を廟底溝型式と半坡型式との二つのみと考えることの誤りであることを指摘している。

仰韶文化の時期区分

前節のとおり、半坡・廟底溝両型式とも四形式に編年された。「蘇論文」によれば廟底溝型式・半坡型式ともに、その二式と三式との間に明瞭な区分が見られるという。

このことは発掘による層位によっても明らかだとされているが、「蘇論文」に使われている資料は、いずれも略報告のみのものが大部分であり、したがって、それらの説明は「蘇論文」の記述を

丸のみにするほかない。

廟底溝型式遺址では、陝西省華泉泉護村第一期文化が早・中・晩の三期に分けられ、早期は「蘇論文」の第2図の一・二式にあたり、さらにそれを2—3期に細分しようという。中・晩期は第2図の三・四式にあたり、これも3期に細分化しようという。この遺址の小口瓶の口縁部の形式変化による編年が「蘇論文」の編年に先立つものであることはさきにふれた。

一方、半坡型式では『西安半坡』の報告^⑩だけでは全時期を代表するのは不充分で、陝西省華泉元君廟遺址の報告原稿（未刊行）には三期に分けているらしいが、その内容は「蘇論文」の第3図の三・四式の範囲を出ないというから、むしろ後期を三つに細分化したものと見えよう。陝西省華陰横陣村遺址も元君廟遺址と同じく、陝西省宝鸡北首岭遺址^⑪が一—四期を含むらしい。

「蘇論文」による前後二期の大きな区分のほか、各地の遺址の編年が進むにしたがってそれがまた幾つかに細分化されてゆくものと思われる。

ところで、この前後二期の区分は廟底溝型式、半坡型式のみでなく、洛陽地区の仰韶文化も、前後二期に大きく区分され、また年代も一致しているという。

「蘇論文」には、(一)洛陽地区一期にあたる洛陽王湾遺址出土の

I・II式双唇小口尖底瓶と二期初層出土のIII式瓶との間には、廟底溝型式の二式と三式の間のような区分が見られる。(一)洛陽地区一期の一段と二段にあたる、洛寧孟村の下層と上層出土の瓢形口瓶の間の变化は半坡型式の一式と二式の間の変化と一致する。(二)洛陽地区一期の第三段にあたる寨子遺址出土の、廟底溝と類似の植物紋彩陶の構図の特徴は廟底溝型式のI~III式にあたり、二期初段の王湾遺址出土の彩陶文様は廟底溝型式のIV式にあたり、洛陽地区一、二期間の区分は廟底溝型式の二期と三期の間の区分に一致する。(三)洛陽地区一期初めの洛寧孟村下層の土器中に廟底溝型式の泉護村遺址の最古の層のものと一致するものがある。(四)洛陽王湾二期末の土器のうちに廟底溝二期文化と接近するものがある、などの点をあげているが、どの資料も略報告のままで具体的な内容を知ることができないので、一応そのまま紹介するにとどめる。

ともかく、以上よりして、洛陽地区仰韶文化の二大区分は廟底溝型式、半坡型式の相対年代関係と分期とに一致することになり、この地域をも含めて仰韶文化は全体として大きく二つに分けることが出来るようである。

時期区分の内容については、より多くの資料が発表されない限り、その当否は確かめられないが、すくなくも「蘇論文」によつ

て、どこで時期区分するかは別としても、仰韶文化全体にわたって、土器の編年をもとにした考古学的な年代づけの一端が示されたのは大きな意義があるといえよう。今後この「蘇論文」を軸として、土器形式による編年の作業と、精密な細分化がより一層進められ、それによって、仰韶文化の細部にいたる区分が明らかになつてゆくことが期待される。

仰韶文化の社会発展段階

仰韶文化の編年とともに、最も討論の争点となつたのは、仰韶文化が社会発展のどの段階にあたるかの点である。当然のことながら、「原始社会の究明」にあたって、最も重要な課題であることは言をまたない。それだけにまた多くの意見が出されている。さきの編年とともに李衍垣氏によって一応の整理がなされているので、それをもとに紹介してみると、仰韶文化を母系制社会の段階とみる説が圧倒的であるが、その内容は人によって違いがあり、柳用能氏は母系説にたちながらも、これを群婚段階とし、王珍氏は対偶婚を主とし、群婚を従とする段階としており、吳汝祚氏の対偶婚段階とする説などに分れる。

それぞれ内容に若干の差異はあるが、いずれも母系氏族社会であるという点で一致しており、生産労働中で女子が主要の地位を

占め、生産資料の所有形態のうえで氏族所有制を實行していると考え、仰韶期の墳墓での女子を中心とする合葬や、灰坑と窯址が住居址とは別に密集しているのはその表われであるとしている。

仰韶父系説をとるのは許順堪氏唯一人で、この地域に農業と牧畜業の分工を前提としており、この点に周慶基氏の批判をうけてゐる。

こうした種々の説も、編年の充分に行なわれていないまま、仰韶文化の時期区分にもほとんどふれておらず、また論拠の多くは墓葬に重点がおかれ、それに住居址と灰坑などをわずかに援用するだけであり、まして我々には論拠の資料の多くが略報告のみであることなど仰韶文化の編年以上に近づき難い点である。

「蘇論文」は前節にのべたごとく、仰韶文化の編年の大綱をまずつくり、そこから前期と後期の時期区分を行ない、そのうえで立って社会发展段階の問題にとり組んでいるのはうなづける点である。そして、この両時期において、社会文化様相のうえで差異が見られ、生産工具の製作技術のうえで仰韶後期は前期に比べて明らかかな進歩があるとして、生産水準の高まりに重点をおいて、社会の新しい発展の様相を捉えようとしているのは、先の諸説と比べて正しい態度であるといえよう。

「蘇論文」では生産工具の製作技術上の進歩として切鋸技術の

進歩と石器穿孔技術の改良、土器では小形の輪製土器の出現をあげている。これらはいずれも「蘇論文」のいう仰韶後期にあらわれる技術上の進歩で、とくに薄く大形で、角を鋭く、あるいは精細に小形に、つくられた石製の鐘・斧・鏃・鏟などが普遍的に出現する意義をあげ、それによって農業の一層の進歩と、手工業が農業から独立してゆく過程を考え、仰韶後期にいたって社会関係上に変化を生じ、母系制社会ではあるが、そのなかに父系制社会の萌芽を見ようとする。

墓葬においても元君廟、横陣村など仰韶後期遺址の墓葬中、整然と氏族制の伝統を保つ墓地のなかに、成年男女と幼児の合葬という明らかに埋葬秩序に反する墓葬のあること、また元君廟や半坡の遺址のうちに厚葬を示すものがあり、陝西省太平庄墓では成年女性の仰臥伸展葬墓中に多くの土器、石器、骨器と、陶甗鼎という珍らしい土器（第4図参照）などを副葬した厚葬をあげ、そこに仰韶後期に私有制が出現しはじめており、仰韶前期が母系制社会であるのに対し、母系社会ながら生産力の向上にともなつて、その枠を打破ろうとする動きのあることを指摘している。またこの発展は廟底溝付近が早く、次に半坡付近へ及び、更に周辺へ拡まって、全体として、発展の度合いは不均衡と考えられている。

仰韶文化の起源と伝播

河南で仰韶文化を発見したアンダーソンは西方からの伝播の道筋を求めて西へ甘粛におもむき、いわゆる甘粛六期の各文化を発見した^②。しかし、新中国の考古学的調査の進展によって、この編年は全く新しく組立なおされた。

一九五七年の甘粛省蘭州雁児湾と甘粛省臨洮、馬家窯—瓦家坪の調査において馬家窯文化が仰韶文化の上層にある層位関係が明



第4図 陶鸚鼎〔林巴奈夫氏撮影〕

らかにされ、甘粛の馬家窯文化が実は中原の仰韶文化の影響下に生まれたものであることが明らかとなった。またこの調査と前年の甘粛省臨夏劉魏家^③の調査とで馬家窯文化層の上に齐家文化層が発見され、かねて疑問のあった齐家文化の位置が層位的に決定されたのである。

仰韶文化と馬家窯文化との関係については馬承源氏もふれており、石興邦氏は土器の形態と、特に彩陶の文様の類似から、馬家窯文化に甌底溝型式との親縁関係を見る興味ある結論を出している^④。

このように甘粛仰韶文化の方が新しいとなると、仰韶文化の起源、それに中国での彩陶の起源も、中原の仰韶文化の範囲から見出さねばならない。

仰韶文化の編年を行なった「蘇論文」ではその早期から晩期までの各形式が揃っている半坡、廟底溝兩型式を含む、陝西省宝鸡—河南省陝県の間にその発生の中心を求めようとし、より具体的には陝西省華山の華山の脚下がその中心ではないかとしている。

さきの夏鼎博士の報告中にも陝西省西郷李家村遺址^⑤から発掘された、内側に黒スリップをかけ、外側を紅色とし、線紋か細縄文で飾り圈足をつけた鉢や、砂まじりか細陶で、器の形は直筒形かあるいは口が大きく底の小さい杯形かで、底に三足を粘接し、器

壁と足に縄文を飾った三足器などはすべて仰韶遺址の最下層に見られる土器で、しかも彩陶を含まないところから、典型的な仰韶文化と密接な関係がありながらそれよりやや古い文化ではないかとされている。ただその発見位置は中原から秦嶺山脈を南に越した漢水上流で、「蘇論文」の華山付近とは大巾に異なる。

この関中と晋陝の間の東西にせまい地域に発生したと思われる仰韶文化は、西方へは甘肅省の洮河流域の臨洮一帯と青海省東部の民和一帯、東方へは河南省の洛陽から鄭州一帯まで、南方へは陝西省南部の漢中と湖北省襄陽間の漢水流域一帯、北方へは内蒙古托克托県一帯までの間に広く分布している。

この拡がりには中原土器との比較によると、まず南北方向へ拡がり、次に東西へ伝わり、西北方は遠くまで、東南方はそれほど遠くへは広がらなかった。各地域の発展はこの拡大に歩調をあわせて不均衡な発展を示すという。

おわりに

仰韶文化をめぐるいくつかの問題を、以上に「蘇論文」を中心に紹介してきた。「蘇論文」は見えてきたごとく、従来の各種の論考に比べてすぐれた点が多く、その見解には傾聴すべきものがある。ことに半坡、廟底溝Ⅱ型式の編年は器形の変化と彩陶文様の

変遷を基礎とした実証的な方法によっており、始めて現われた科学的な仰韶文化の編年体系といえよう。しかも編年だけに止ることなく、最も問題の社会発展段階にまで鋭い突込みを見せ、生産工具の改良による生産力の高まりを社会発展の原動力としてとらえているのは的確な研究方法である。

しかし、そうはいっても「蘇論文」で仰韶文化にまつわる様々の問題が一挙に解決したとは勿論いうことは出来まい。まして現在のように重要な遺址の多くが略報告のままで、正式に報告の出版されたものが数少ない現状のもとでは「蘇論文」の結論の当否を十分に検討することも不可能であり、それらの正式報告の出版が望まれる。

問題の土器編年においてもセットとしての土器の編年により、より確実な証明がほしい。小口瓶、砂陶罐、細泥彩陶盆・鉢が基本土器の組合わせといわれるが、砂陶罐についての編年がないのは物足りない。各地の遺址における層位関係を基本とした編年がより多く出され、それらを集大成した精密な編年作業が行なわれねばなるまい。

仰韶文化の起源については、より多くの疑問点があげられる。「蘇論文」の編年図表によると、半坡、廟底溝Ⅱ式ともに、一式つまり最古形式に属する彩紋盆がなく、Ⅱ式にはじめて出現する

ことになる。このことは彩紋をもった盆が現われるのは二式からなのか、盆そのものが二式にはじめて現われるのか、編年図表と報告された資料だけからは理解のしようがない。

仰韶文化イコール彩陶文化ではないことはかなり以前から述べられていることであるが、彩陶をもたない仰韶初期の段階と彩陶が現われてからとはどのような違いがあるであろうか。

アンダーソン流の甘肅を經由しての彩陶西方伝来説は破られたようにいわれるが、それらの疑問が解明されない限り中国の彩陶が独自に発生したとするにはまだ証明が充分とはいえない。

廟底溝型式と半坡型式がそれぞれ別の形の仰韶文化であることが明らかにされたが、この差異はどのようにして出現したのであるか。ことに注目の社会発展段階を考えるのに、石製生産工具の改良に重点を置いて前後の二時期に区分されたが、石製工具のすくないという廟底溝型式においても同様なのであろうか。原始社会の究明には最も重要な課題であるからには、充分の証明のほしいところである。

このようになお多くの問題が残ることとはいえ、ともかく仰韶文化をめぐる数々の問題に整理の糸口をつけたことは「蘇論文」の大きな功績といえよう。このうちは主要遺址の正式報告が一刻も早く公刊されることを望みたい。そうした基本資料の積重ねに

よって、より一層の研究の進展がみられるのはいうまでもないことである。困難な「原始社会の究明」に真正面から取り組んでいる中国の考古学者達の諸論考を紹介していささかの参考としたいたい、燕雑な筆をとった次第である。

末筆ではあるが、種々指導頂いた樋口隆康、林巴奈夫両氏、それに小野山節氏はか「中国考古学研究会」の諸氏に厚く御礼申し上げる。

(一九六六・八・七)

- ① 中国科学院考古研究所・陕西省西安半坡博物館編『西安半坡』—原始氏族公社聚落遺址(『考古學專刊』丁種第一四号、一九六三年)。紹介したものとしては、秋山進午『西安半坡—原始氏族社会の究明—』(『大安』第一〇巻第五号、一九六四年)
- ② 中国科学院考古研究所編『廟底溝与三里橋』(『黄河水库考古報告之二、考古学專刊』丁種第九号、一九五九年)。
- ③ 水野清一「中国先史時代の展望」(『東洋史研究』第一六巻第三号、一九五七年)。
- ④ 松崎寿和『新黄土地帯』(一九六〇年)。
- ⑤ 中国科学院考古研究所編『新中国的考古收穫』(『考古学專刊』甲種第六号、一九六二年)。
- ⑥ 前著、杉村勇造訳『新中国の考古收穫』(一九六三年)。
- ⑦ 中国學術代表団歡迎京都地区実行委員会「中国學術代表団京都訪問記録」(一九六四年)。
- ⑧ 夏鼐「我國近五年来の考古新收穫」(『考古一九六四年第一期』)。
- ⑨ 前著、近藤義郎訳「中国における最近五年来の考古新收穫」上・下(『考古学研究』第一巻第四号、第二巻第一号、一九六五年)。
- ⑩ 中国ではそれ／＼に「類型」という用語を使っている。この紹介ではこれを一応「型式」と訳しておく。

- ① 李衍垣「關於「仰韶文化」的討論綜述」(《考古》一九六四年第七期)。
 ② 楊建芳「略論仰韶文化和馬家窑文化的分期」(《考古學報》一九六二年第一期)。
 ③ 方殷「從廟底溝彩陶的分析談仰韶文化的分期問題」(《考古》一九六三年第三期)。
 ④ (1) 黃河水庫考古隊華泉隊「陝西華泉柳子鎮考古發掘簡報」(《考古》一九五九年第二期)。
 (2) 黃河水庫考古隊華泉隊「陝西華泉柳子鎮第二次發掘的主要收穫」(《考古》一九五九年第一期)。
 ⑤ 黃河水庫考古工作队陝西分隊「陝西華陰橫陳發掘簡報」(《考古》一九六〇年第九期)。
 ⑥ (1) 考古所寶雞發掘隊「陝西寶雞新石器時代遺址發掘紀要」(《考古》一九五九年第五期)。
 (2) 考古研究所渭水調查發掘隊「寶雞新石器時代遺址第一、三次發掘的主要收穫」(《考古》一九六〇年第二期)。
 ⑦ 陝西考古所澄水隊「陝西郿縣下孟村遺址發掘簡報」(《考古》一九六〇年第一期)。
 ⑧ 北京大學考古實習隊「洛陽王灣遺址發掘簡報」(《考古》一九六一年第四期)。
 ⑨ 北京大學考古專業實習隊によって調査されたが、報告は未發表である。
 ⑩ 柳用能「『廟底溝与三里橋』文化性質的幾個問題」(《考古》一九六一年第一期)。
 ⑪ 王珍「略論仰韶文化的群婚和对偶婚」(《考古》一九六二年第七期)。
 ⑫ 吳汝祚「從墓葬發掘來看仰韶文化的社會性質」(《考古》一九六一年第二期)。
 ⑬ 許順湛「仰韶時期已進入父系氏族社會」(《考古》一九六二年第五期)。
 ⑭ 周慶基「對仰韶時期已進入父系氏族社會一文の意見」(《考古》一九六二年第一期)。
 ⑮ ターン・テール式の技法であるが、「蘇論文」ではかなりはつきりと証拠をあげている。
 ⑯ 註14・2、の墓四五八・四二九や、註1(二四頁)、一五二号墓などを指すと思われる。
 ⑰ 陝西省華泉太平庄墓は「蘇論文」で始めて大要の知られた遺址で、泉護村の南にある仰韶期の墓葬である。被葬者は成年の女性で仰臥伸展葬。副葬品は細泥黑陶小口瓶一、細泥黑陶鉢一、紅砂陶釜一、一、黑泥質大型陶鬲(尊)一、石鏟一、有穿石斧一、骨七一四、骨筭一の多きにのぼり、中でも陶鬲は希有の品である(鬲は鷹科の猛禽でミサゴ。なお「蘇論文」の挿図一二の説明には鴉一フクロウとあるが、こゝでは本文の鴉一ミサゴによる)。
 ⑱ J. G. Anderson "Preliminary Report on Archaeological Research in Kansu", Pekin, 1925. [安特生「甘肅考古記」(地質專報)甲種第五号]。
 ⑲ 甘肅省文物管理委員會「甘肅臨洮、臨夏兩縣考古調查簡報」(《考古通訊》一九五八年第九期)。
 ⑳ 安志敏「甘肅遠古文化及其有関的幾個問題」(《考古通訊》一九五六年第六期)。
 ㉑ 馬承源「略論仰韶文化和馬家窑文化的問題」(《考古》一九六一年第七期)。
 ㉒ 石興邦「有関馬家窑文化的一些問題」(《考古》一九六二年第六期)。
 ㉓ (1) 陝西分院考古研究所「陝西西鄉李家村新石器時代遺址」(《考古》一九六一年第七期)。
 (2) 陝西省社會科學院考古研究所漢水隊「陝西西鄉李家村新石器時代遺址一九六一年發掘簡報」(《考古》一九六二年第六期)。
 (大阪城天守閣 学芸員)

Buddhism, what kind of Buddhism was influential in Gandhara, which has been investigated through the study of Buddhist scriptures and inscriptions. Source materials of Gandhara Buddhism were not only scriptures and inscriptions but also ruins of the Buddhist temples, with many stones and sculptures of Stuko. These sculptures were under the strong influence of the Western Art away from the Indian art, so that, with much interest in this point, the relation between the Greek or Roman and Gandhara art has been mainly studied up to now.

This article, considering the change in style of the Buddhist sculptures in Gandhara, will explain the development of Buddhism in Gandhara and its relation to the Buddhist art in China.

On the Character of the Elizabethan

Age: as a dessin

by

Masahiko Uemura

What part was allotted to the Elizabethan age in a drama of English History? It was the national unity of England. In what sense was it Tudorian or Elizabethan? The monarch was situated in the pivot of the body politic and ranked first of all the estates of the realm; there could be allowed no other authority or no other power to exist than the crown; the monarch had to take the lead and give paternalistic regulations in every sphere of national life. But after the 1580's the changes in the international affairs, the economic crisis and the other serious conditions were going to bring the Tudor system of government to its collapse. The Queen and her ministers had no idea to cope with the new situation and left everything to the care of her successors who did nothing but yielding the destruction of the national unity.

Inquiry of Primitive Society in New China

—Some Problems about the *Yang-shao* 仰韶 Culture—

by

Shingo Akiyama

In the currents of the Chinese civilization, the *Yang-shao* 仰韶 culture is the important current from which it took its very rise. With the

rapid development of the archaeological investigation after the Emancipation, immense ruins were discovered and it is proved that there exist two cultural types of *Miao-ti-kou* 廟底溝 and *Pan-p'o* 半坡 in the *Yang-shao* culture in the midland, which have been discussed in their priority and cultural character, though only two ruins of *Miao-ti-kou* and *Pan-p'o* bring the published formal report to us who have too small materials to join the discussion. *Su-Ping-ch'i's* 蘇秉琦 monograph recently published also has no material as well. But his method of chronology and study for the social stages is valuable with its scientific contents.

This article is to examine some problems about the *Yang-shao* culture in main reference to "*Su-monograph*" 蘇論文 with some important monographs recently published, and leads to Chinese archaeologists' passion to "inquiry of primitive society" in their effort to study the problems.